The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	作品について話すこと
Author(s)	江川, 久子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 23-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

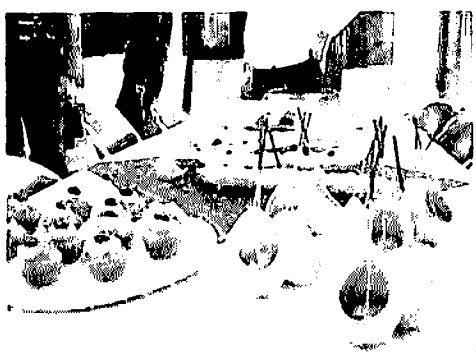
作品について話すこと

江川久子

辻が「野村とおのの二人展」を思い立ってから、「紅をさす」展の企画・運営を私もほんの少しではありますがお手伝いさせていただくことになりました。とはいえ、私は日本舞踊をやっているので、美術や絵画について詳しくないわけです。今回、ギャラリートークについての感想を書かせていただくことになりましたが、もしかしたら美術や、「紅をさす」展の絵画作品からは離れてしまうかもしれません。スタッフとしてというよりはギャラリートークの参加者として「作品について話すこと」について思ったことを書いていきたいと思います。

作品をみながら「作品について話すこと」は、その時その場所でしか現れてこないひとつの作品をたちあげていくことでもあるでしょう。しかし舞踊の場合、作品をみながら「作品について話すこと」は困難です。ダンサーは自分がいま踊っている作品を目の前にして「作品について話すこと」が出来きません。それは、舞踊は絵画作品とは違ってダンサー自身の身体を素材にして行うからです。観客も全身で舞踊をみているわけですから、作品をみながら「作品について話すこと」は難しいでしょう。(もしかして出来ないことはないかもしれないですが試したことはないです)

舞台の後、一緒に観にいった友人や、踊っていたダンサーとその「作品について話すこと」は出来ますが、私は舞踊について話すこと自体難しいことだとも思っています。(このことは〈舞踊って何?〉という問題に関わっていますが)だから私は、作品をみながら「作品について話すこと」はとても貴重な体験だと思います。しかも、今回のギャラリートークでは作品を前に作家二



人も参加しています。その上、知らない人とも一緒に作品をみながら「作品について話すこと」を体験できたのです。たまたま美術館やギャラリーに訪れて作品を目の前にしたとしても、そういう体験はあまり出来ないと思います。

私は、三年くらい前には芸術作品は人と関係を持つための道具だと思っていました。いまは作品自体が生命を持つこともあると思っていますが、そういう作品の生命のようなものを受け取ってから、その残像を言葉に変換するというのは思っている以上に大変な作業です。臨床哲学の桑原さんや高橋さんは、いろいろな人からその言葉を引き出すためにきっとご苦労されたことと思います。

臨哲さんの方法は、描き方や美術史からではなく、その作品の色や形やキズをみえたまま話すというものでした。それは、人がものをみるときにいつも掛けているフィルターを垣間みることでもあると思います。そのフィルターが人それぞれ違うのは当たり前ですが、自分とは全く違うと認めることは、人が人と関わる時に避けられないことでしょうし、反対に、もしかしたら共通することがあるのかもしれないと期待するということは、誰でも求める思いかもしれません。自分とは違うかもしれないけど、同じかもしれないというアンビバレンスな宮藤が、今回のギャラリートークのように公に晒される機会はなかなかありません。そういった意味でも臨哲さんの方法で行ったギャラリートークには興味深いものがありました。欲を言えば、もっと破壊的なコメントが飛び交うことを許したほうが良かったのかなとも思いますが。

最後になりましたが、今回のギャラリートークに関わったすべての人に感謝いたします。ありがとうございました。

えがわひさこ

「紅をさす～野村嘉代：おのさやか二人展～」企画運営担当。

一九九七年より日本舞踊家花柳光雅に師事。

現在、教徒造型芸術大学大学院博士課程一回生。

二〇〇二年より芸術文科研究科において小林曾廣ゼミに入り日本舞踊研究を行う。

二〇〇四年より非常勤講師として三重県立名張高校にて「芸術各論」の授業を担当。

只今実験的舞踊公演の企画が進行中。企画運営／製作（実演）担当予定。